



ローズボートオールド

ローズポートオールド

カギと門番。

竹ぼうきと魔法使い。

ドラえもんと四次元ポケット。

手塚治先生と絵描き帽。

ジヤン・ヘンリ・ファーブルと虫眼鏡。

姿三四郎と柔道着。

ティースプーンと、スプーンおばさん。

津川とエンピツ。

誰もがもし、なにか、物と対になつているとしたら。

その一人と一個の営みが、穢されることのない時間を作つていくのだとしたら。

彼女のそれは、古臭い渡し舟の他にない。

とはいえ、僕は、彼女が舟に乗ったところを見たことがない。
しかし、それは大した問題ではない。

そつと目を閉じれば、僕はその時間に会うことができる。

眠りにつくとき。夜に缶コーヒーを買いに出掛けるとき。教室の窓から目的のない景色を眺めるとき。何度も繰り返された、その根拠のないイメージは、僕の心に、何か確信的な陰影をもつて、焼き付いている。

目を閉じて見る彼女は、舟の上に立っている。

川の水面の中央で、両手をダラリと、足下の頼りない木製の遺物に運命を委ねて、ただ突っ立っている。

色の薄い瞳。

いつか、その彼女の視線が、舟の尾で力尽きた一本の櫂を捉える。

川辺にいる僕は、彼女に気づかれないよう、息を潜める。木々の隙間で気配を薄め、

その瞬間が訪れるのを慎重に、気長に待つてゐる。

枝葉に縁取られた景色が視界の背景になり、彼女の檸色の髪の先が音もなく揺れたころ、彼女の周りの靄が、そこだけ濃度を高めたように、ドーナツ型に浮き上がる。

それは例えると、間合いのようなものだ。

僕が高校の三年間で身に付けた、一時的で戦闘用のそれとは違い、彼女のそれは、他人からすると無害過ぎて退屈な、でも彼女からすれば、彼女の営みそのものが宿つている、半永久的な空間だ。

彼女の間合に包まれて、目を覚ました一本の櫂は、すぐには彼女に掴んでもらえない。檸色の意識に浸されるように、ちょっと辱められるように、関心半分そうな彼女に眺められる。

いつか、その平べったい木片が、彼女なりの理によつて解されたとき、彼女はついにその櫂を右手に掴む。触ることで繋がったオールを、彼女は小さな肩で押し出すように扱つてみる。

でも腰が入っていない。

彼女は、いつも外の世界に対して心半分だ。それが姿勢に現れる。集団行動下では、

その癖が顕著で、身体のラインに凹凸の強弱をまるで効かせない彼女は、いつも記念写真の中心にいない。

色っぽくない船主を乗せて、ついに舟は川を漕ぎ出す。

きーー・・・こ。

川の水を押し出そうとオールが軋む音は、同時に彼女を呼んだり唱えたりする声になる。僕は、待ち望んだ、決して訪れて欲しくなかつた瞬間に目を瞑る。それはもう一生、これ以上がない一つの調和の時間だ。

きーー・・・こ。きーー・・・こ。

それが例え三途の川でも、彼女と、彼女と連帶した小舟は先へと進む。人と舟の、当然の作用として。あの世には、結果として近づいていく。

開けた対岸に立つみんなは、それを泣いてとめるべきか、手を振つて見送るべきか、きっと勝手に作り出した悲哀なんかの感情を持て余すだろう。だって、彼女にあの世は見えていなくて、いつも通りの調子なのだから。

ファイト！

僕だけが思わず声を張り上げるだろう。

きーー・・こ。ふあいとー。

きーー・・こ。ふあいとー。

遠ざかる彼女と小舟を、一枚の絵に残すのでも、一曲捧げるのでもない。僕は大声でその調和の営みに横槍を入れる。舟を漕ぐ彼女が、永遠の思い出か何かに閉じ込められてしまわないように。威勢よく、けばけばしい花を差し出し続けているのだ。

「ねえ」

そう肩に触れたのは、きこの指先だつた。

——戸川賢志。返事をしなさい。

次に講堂内に響いた声は、崇高な天上から愚かな民衆への、曖昧な啓示のようで、僕の両目は彼女の顔に焦点を合わせた。

心配しているのか眉間には皺が寄っている。愛嬌のある角のない顔と目。色の薄い瞳。手を戻したきこは、櫂も持たずに僕と一緒に長椅子に隣り合つて座つていた。背景には広大なスペースを敷き詰めるように並べられた長椅子と、その九割に収まる生徒と教員たち。ドーム状の天蓋が色のくすんだ世界を覆つっていた。

卒業式の予行練習。僕は慌てて立ち上がった。

「はい」

ただの教頭だつたマイクの主を捉えて、僕は授与の礼をした。辺り一面ブレザーと頭部の波間から卒業生百人分くらいの目が僕に視線を集め、僕は憮然とした顔で腰を下ろした。阿呆らしい、という気持ちはそのまま口から零れてしまつた。

その愚痴に続く解説を待つように、彼女が僕を眺めていた。見返す僕の視線自体には興味半分、といった様子だ。

「だつてさ」僕は両膝に手を置いた。「返事をする練習なんて
なあ、と僕は彼女に言つた。

僕の言葉を波に漂わせるように、きこはゆっくりと一回、頸を上下させた。そして右手を左の二の腕に当てたまま、前の座席の背もたれと壇上の間辺りの中空を眺めていた。

「名前を、三百個」

きこが呟いた。

僕は、彼女と視線を重ねるようにマイクスタンド辺りを眺めた。

はじめは、名前が三百個。うん、悪くない。

僕らが互いに手繰る沈黙に、学校の声がこだました。

——中村きこ。

三百人分の閉口をドーム型の木造に圧しかからせてから、彼女は意外にも、毅然と立ち上がった。「はい」

僕は束の間の小休止のつもりで、視界半分に彼女を眺めていた。彼女は目に掛かる前髪もそのままに頭を下げる、自分の座っていたスペースに片手を置いてから、ストンと腰を下ろした。

続く解説を待つ僕の顔に気付くと、彼女は小さく肩をすくめた。

「まあ、しようがないよね」

僕の眉間に力が結集した。仕様がない。名前が三百個。

思考の舟が、その二つの杭を八の字操行で繰り返し辿った。途方に暮れて川辺を振り返ると、そもそも自分の発した言葉に、小さな灯台を見た。

「たかが返事の練習も、仕様がない？」

彼女は僕に向いて、につと笑った。

「しようがない」

そうか？

僕は前屈気味になつた彼女を眺めた。

はじめを捨てた背中を肩甲骨まで後ろ髪が流れていた。

僕はその流れに既視感にも似た小さな寒氣を得て、真上を見上げた。
一定に、単調に生徒の名前を唱え続ける教頭の声が講堂全体に響く。その言葉は妙に
莊厳だ。普段はもつと、巣穴にこもつた小鳥のように、弱々しいのに。

上を見上げると、天蓋の構造が見える。弧を描く無数の木材が、重要文化財のように
組まれている。一中年教諭の声は、天蓋によつて格上げされていたのだ。教頭は指人形で、
講堂が本当の主のようにも思える。ドームの一番天辺には小さな円窓が貼り付き、曇り
空が窺えた。

——泥のついた十円玉を、戦後から悠久もの時をかけて積み続け、雄々しく築き上げた
のだ。

一つ取ると、例えばそんな話が耳に届いてきて、僕は視線を卒業生たちの背中に移し
た。

近々、僕らの今日であり明日であつた生活は、どこか外からの力によつて思い出として区切られる。

今回は封鎖シャッターのような形かもしれない。

まえに僕たちの昨日たちを過去に遠ざけてみせた外の力は、いまこうして彼女の後ろ髪の尾に形を残している。

きこと二年次のクラスメイトになつて、僕らは一緒に遊ぶようになつた。もちろん、いまは馴染みの、当時は席を外して欲しかつた他の友人も一緒だつた。

津川と夏子さん。その頃、最も僕ときこと交流があつたのが、その二人だつた。

二年の始め、僕ら四人はよく一緒にいた。でも、グループというには、どこか頼りなかつた。味を期待しないコーヒー、後ろめたさを味わうアルコールを真ん中に置くことで、何とか集団の輪を作つていた。そんな日々の繰り返しの中で、きこの瞳を直に見れなくなつていつた僕の目に焼きついたのは、ぴょーん、と外に跳ねた横髪と、彼女のマイペースを弁解するような、毛先に統率が取れていない後ろ髪。

もちろん、あの頃のきこだつて十七歳の女子高生だつたわけで、鏡があれば綺麗なブラシで髪に落ち着きを与えてみようともするだろうし、同じ高校生を二年もやつている

内に、もう一段階上の大人の女性らしさをめざして髪を伸ばしてみることだつてありうる。その間に彼氏が一人できることなんて、もう自然の摂理とさえ言えるかもしれない。ただ彼女の場合は、初恋と髪型が平行しただけだ。大学生の男と付き合つて、横が平らに。その人が彼女を振つて、全体がロングに。そんな少しの関連性でいまの髪を呪いのように見るなんて支離滅裂だ。

「ね」

両手を前の長椅子の背もたれに預けたまま、彼女が僕に向いた。

「ん？」聞き返すと、そのままの手触りから手を離して言つた。

「式の当日つて、部活の打ち上げとかあるの？」

中空から、ふん、とても気合が聞こえてきそうな感じで、彼女は両手で襟を締め上げる格好をした。

彼女は「柔道」と言う代わりにその仕草をする。

「挨拶とかは部活の最終日にしたけど」地区予選の準決勝という引退試合で、僕が相手から締め技をくらつてからだ。

「あとは胴上げくらいかな」

場外にきこがいる始めての試合で、僕は膝をついても床を二回叩かず、気を失った。その悶絶か胴上げの風景を想像したのか彼女は笑つた。

「じゃあ、みんなで集まれるかもね」

「そうだな」僕が頷き、彼女も前に目を遣つた。

僕らの視線の先には、壇上の前に設置された幾つかのパイプ椅子に数人の生徒たちが並んで座つていた。

たぶん右端の二つの後頭部を眺めて彼女は呟いた。「凄いよね」

津川と夏子さん。僕らの友達。

僕は、その彼と彼女の後姿に頷き返した。

「うん」

美大と音大。そこに進学するために越えなければならないハードルの具体的な基準や、それぞれの優秀な点が一人のどこにあるのかは良く分からぬけれど。コンクールで賞を受賞して浪人をすることなく入学を決めたそれぞれの実力には、こうやつて特等席が用意されている。

「なんか」彼女が声を漏らした。「わたしの鼻も高くなっちゃいそう」

「うん」僕は一回頷いた。「うん」

とにかく、僕は津川が黙々と画を描いたり、夏子さんが手暇なとき小さな電子鍵盤を弾いてくれる時間が好きだった。式で賞が贈られるのは、僕らが一緒に過ごした時間が一部でも評価されたようで、嬉しくなる。そして当たり前の日々に存在したその些細な時間に対する気持ちを先に言葉にできていたきこそ、僕は尊敬した。肩を張らない時間は、終わることを知つてこそ、慈しむことができる。

「あのさ」彼女が声を出した。

「なに」津川の後頭部を見たまま、僕は答えた。

んんー、と彼女は言い方を考えるように唸つた。

津川の後ろ頭の位置が、他の何人かよりも低かつた。腰がずるずると椅子のシートからみ出しているのかもしれない。

居眠りか怠惰か反抗か。

「わたしがいまの仇名で呼ばれるようになつたきっかけ」

たぶん怠惰から居眠り。結果的に反抗だ。「ん」僕は彼女と目を合わせた。
「憶てる?」

「うん？」僕は頷いて、先を待つた。

「わたし、この高校に入ったころは特に、反応が鈍かつたみたいだね」
きこ。ねえ、きこつてば。

俯きながらそう口真似をした彼女の目は軽く閉じられていた。
「友達が呼びかけてくれても、わたしは中々振向かなくて」

「きーこお」

きこがゆっくりと顔をあげて、僕を見た。

「そう呼んでくれたの、初めてだ」

「その呼び方は」僕は頷きながら言つた。「残念ながら、そいつの口に馴染んでしまつた」
彼女は失笑して頷いた。「みんなそう呼ぶつてことは、その仇名はわたしの顔によつ
ぱど上手く貼りつくんだね」

「そう」僕もつい口を緩ませた。「神話ができるくらい」

彼女は微笑みながら首を傾げた。

「それで？」と僕が聞くと、彼女は笑んだまま膝辺りに視線を戻した。

「それって、わたしの、のんびりさだつたと思うんだけど」

うー、ん。と僕の顎は下がりっぱなしになつた。他人からすれば、そうかもしれない。

「でも、たまには走らなきや駄目なんだよね」

今度は僕が首を傾げた。「ん?」どこへ?

彼女は津川と夏子さんを見た。「あの二人は凄いよね。ちゃんと卒業前に丁度一段上に来年の場所が用意されている。賢志くんたつて勉強で大学に推薦入学が決まつてる。わたしは土壇場の専門進学」

「卒業なんて」僕は口を挟んだ。「悪く言えば大勢を追い出すための綺麗な口実で、実際の僕らにとつては一つのきっかけに過ぎない」担任の愚痴も挿借した。「例えば大学の卒業なんて、未熟な人間が社会に雇つてもらうための免罪符に過ぎない。それ以上でもそれ以下でもない。生活の場だつてきっかけの一つに過ぎない。あの二人が芸大と関係のない高校で次の一段を踏み出したように、きこは次の一・二年間で、まず足元の一段目をきこなりに探してみればいい。学校の期限に縛られることはない」

だろう?と僕が言う前に「そだね」ときこが引き継いだ。「だから早く社会人として働けるように頑張らなきゃね」

僕が言いたかつたのはそういうことではなかつた。でもきこは相談を持ち掛けたので

はなく、決意を口にしたかつただけのようだ。「無理はよくない」僕が言えたのは未だ見知らぬ彼女への励ましだけだった。

「うん」ありがと、そう呟いた彼女の横顔を僕は眺めた。

初めての付き合いがあれば、初めてのお別れもある。それを必然と悟ることはできるかもしれないけれど、誰も傷つくために心を尽くすわけはない。だから相手が就職間近の大学生だつたなら、受け皿を失つた鮮やかな自分の感情と彼への弁明として、彼女がいちいち社会的な立場に身を置くことだつて、誰にも責められない。

僕なんて、胸の激情を違う場所に追い遣つた。

二年次の七月の夜、自分より四歳も年上の男の欲望が彼女の中に入り込む想像や実感を搔き消す理由や必然とか言い訳を十七歳の僕は見つけられなかつた。許容なんて言葉も浮かばず、僕は一年の体育で体験した感覚を求めて、柔道部に入部した。同輩になつた一年生に混ざつて、焦つたように望んで畠に体を投げつけられた。体の痛みが勝るよう。帰宅部同士で一年から仲の良かつた津川とは、部活のある日は一緒に帰れなくなつた。もちろん、みんなで遊べる機会も減つていつたけれど、僕はより柔道に没頭していく。柔道部は丁度、新しい部長と副部長を選任する時期で、新米のくせいにポストを意

識しているよ、なんて同級の嫌味も耳に入ってきたが、そんなことは一番どうでもよく、今度は立ち向かう壁を欲しがっていた。少し忙しく動くようになつたきこの熱っぽさや、その先にいる大学生の男が見えなくなるように。きこと仲の良い夏子さんとも、学校で二三言挨拶を交わす程度の付き合いになつた。四人で顔を突き合わせることは全くくなつた。

僕は部活。きこは初恋。津川は画。夏子さんはピアノ。それぞれに、放課後の使い方は異なつていき、いつのまにか、冬が終わつた。

偶然や先輩の思惑の結果、僕は副部長になつていた。黒帯は目に馴染み、肩書きの職責に億劫さを感じるくらいにはなつていた。津川は作品として自分の画を意識し始めていた。夏子さんは演奏に表現力を持たせようと技術の習得に熱をあげていた。そしてきこは、保健室の常連になつていた。その目の下の黒いくぼみや丸みの消えた頬のこけ加減を見れば、その恋の顛末を図ることくらいはできた。

そのときの僕が得たのは、安心感ではなくて無力感だつた。

だからいまこうして、きこが僕を打ち上げに誘つてくれたり、話をしてくれるようになつたのなら、その事実と、きこの気分転換に貢献した髪型を喜ぶのが、僕の最低限の

成長だと思う。

ただ、不言実行なんて社会的な長所が残って、その根底であつたはずの、彼女なりの彼女らしさを、非生産的だなんて切り捨てて欲しくはなかつた。

でもそれは、僕が個人的に好きな彼女の部分に対するひいきやエゴかもしれなかつた。なによりそれは正しいのだ。余りに、正しすぎる。

「なあ」

僕は、前を見たままそう言つた。

「んー」

「俺と、きこが初めて会つたのつて、いつだか憶えてる？」

「二年のクラス替えでしよう？」

「違う」僕は首を振つた。「一年の一学期、体育の柔道」

そう言つてから僕は横目で彼女に言つた。

「少しだけ、思い出しながら聞いて」

微笑んでいたと思う僕の表情を眺めて、彼女は小さく顎を上下させた。「うん

僕は両膝に肘を乗つけて、自分の足元に話を始めた。「体育は、男女別だから二クラス

ス合同だろ？ そのときは梅雨で、きこは二人の友達と男子の柔道を見学に来たんだ
僕は大切にしてきた記憶を出来るだけ鮮明に手繰り寄せようとした。「部員とは言つて
もまだ一年生なのに、僕はそいつの柔道技に見惚れたんだ」 僕は片手を回して円を表現
した。「背負い投げだつたんだけど、とにかく、それをくらつたときも敗北感じゃなくて、
爽快だつたんだ。自分が宙を舞つて、仰向けに、何だか寝るべき場所に戻されたつて心
地だつた。俺はそいつに付きつ切りになつて、乱取りの相手ばかりしてもらつてた。ク
ラスメイトにもそいつにもお構いなしで」

彼女は合わせた膝に両手を置いて黙つて聞いていた。

「きこが数人のグループにいたのは憶えていたんだけど、とにかく、気付くと、畳の枠
外にきこは一人でぼつんと座つていて、たぶん俺のほうを見てたんだよ。興味半分そ
うだつたけど。最初は部のやつ目当てかと思つたけど、俺が投げられて、立ち上がるうと
すると、きこの視線も俺に向かつて低くなつてるんだよな」

ふん、ふん。と彼女は頷いた。

僕はそれを見て頷き、続けた。「勝手知つたる我が部室だよな。そいつは、帯を直し
てくるとか言つて、近くの部屋に引っ込んでやつてさ。俺はきこに近づいて聞いたんだ。

投げられている人の方を見てて、面白いのか？ つて

「だつて」いまのきこが言つた。「立ち上がつて投げられて、またすぐ立ち上がつて投げられて。何でそんなに忙しそうに動くんだろうな。つて」

リフレーンに僕の目が開き、頬が緩んだ。「それで僕は思わず笑っちゃつたんだよな。丁度、その前の柔道の授業のときに、たまたま来ていた柔道部の顧問の先生にこう『言われてたからさ。若者、この狭い日本、そんなに急いでどこへ行く。つて。それなりに威厳のある爺さんだつたから何だか耳に残つててね』そう実績のある先生でもなかつたが、一回だけした乱取りでは、柔道なのに、僕は映画で見た合気道の達人の相手役をしたような手応えの無さと負けっぷりを味わつた。

僕は話を元に戻した。「それを話すと、きこはこう言つたんだ。

それで、どこへ行くの？ つて」僕は思い出し笑いを堪えた。「たぶん、そのときの俺の眉間には、とんでもなく皺が寄つてただろうな。なんだこいつ、つて思つたよ」

「でも」きこも笑いを堪えていたようだつた。「賢志くんも、なあにこの人、つて感じだつたよ」きこは右手で口を押さえた。「頭をぽりぽり搔いてからじやあ、トイレにでも。

だつて」声を低くしたのは声真似だろうか。

「仕上げにトイレの方を指差すんだもん。わたしの口は開きっぱなしだったよ」
僕は一応解説した。「なんか答えなきや。と、トイレに行きたい。が合体しちゃった
んだよ」我慢しなくてはならない状況のせいもあるのか、照れながらも可笑しくて仕方
が無かつた。

僕らの含み笑いが收まり始め、彼女が呟いた。

「懐かしいね」

「うん」僕は答えた。「懐かしい」

「それで」彼女が僕を見た。「何が言いたかったのかな？」

「んん？」僕は下を向いた。「何が言いたかったんだっけか

「なにそれ」彼女が少し笑つた。

「きこ」

「なに？」

僕は前に向かつて目を薄めたきこに聞いた。

「寂しくはない？」

「いま？ 別に」きこは少し窺うように僕に目を向けた。

「そつか」とだけ僕は答えた。

「変なの」きこは首を傾げた。

「じゃあ、チューリップとバラ、どっちが好き？」

質問を飲み込めなかつたのか、きこは顔を僕に向かた。「なあに？」

僕は彼女に向かず繰り返した。「どっち？」

「じゃあ」反対側を見た。「チューリップ」

そつか、という僕の声は教頭の声に覆い隠された。

——校歌を一番のみ、斉唱。一同、起立。

僕は無感情に立ち上がつた。でも聞き慣れているせいで、喉は反射的に緊張した。

前奏の終わつたメロディに添えられているのも、やっぱり外が主旨の例え話だろう。隣に立つ彼女は黙つていた。

僕は柔道部で培つたドスの効いた声で、下のパートを歌つた。

「ねえ」

三百人の合唱を背景に、きこが呟いた。

僕は口を閉じ、彼女側の耳が少し彼女に傾いた。

「わたし、保健室にいく」

僕は彼女を向いた。「なんだつて？」

「だいじょうぶ」彼女は無表情に前を、心持ち頸を上げて続けた。「前原先生は断らないよ」
それは担任の名前だった。たしかに、一時は公にカウンセラーの常駐室でもある保健室に通うのが日課になっていた彼女のその要求を断ることはできないだろう。でも、僕は別にそんなことを聞いたわけではなかつた。

彼女の言葉をゆっくり頭で転がしてから、いま？とまず聞こうとした。

顔を向けると、彼女は背を向けていて、もう前原先生に手を挙げていた。

「よかつたら」前原先生が訝しげにこっちに向かってくる姿を背景に、彼女は僕に向いた。
「賢志くんも来て。わたしは保健室の前で待つてる」

僕が何か言い返す前に、「ちよつとごめん」と彼女は長椅子に並ぶクラスメイトの体を押し退けながら、担任の元に向かつて行つたしまつた。
どうやって？

その言葉が平べったく僕の頭の中で伸びていった。彼女の姿が講堂から消え、少しう

てから僕はその言葉を飲み込み、腹の中で押し碎いた。

「先生」

みんなが僕を見て、前原先生はさらに目を困つたようにしてから、近づいてきた。
なんだ？

長椅子の端で先生はそう口を動かした。

「トイレに行かせてください」

僕は即興で用意した言葉を腹から押し出した。

先生の眉間の皺が亀裂にまで育つた。次への字になつた口が動いた。

「わかった」

脈絡のない成功を訝しげに思いながら、僕は頭を下げた。「すいません」いそいそと
長椅子から抜け出した。

「ほら、さつさと行けよ」

先生が僕の後ろから急かした。振向くと先生が溜息混じりに呟いた。「お前、すごい
顔してるぞ」

意識していなかつた顔の緊張が解けそうになり、僕は眉間に力を戻して会釈した。

そして長椅子と壁の間の通路を進んだ。生徒たちの訝しげな視線と、先生たちの大体迷惑そうな視線を浴びながら、足早に、次第に胸を張るように出口に向かつた。

だつて、この先で、きこが待つていてる。

扉が見えてくると、僕は上を見上げた。

視界に広がる手間の掛かった天蓋の光景を、僕は鼻息で済ませた。

そもそも、僕は段階を踏まずに彼女との距離を真隣に設定した学校意思に腹を立てていた。老師面する講堂もこみだ。

講堂を抜けて、歩き慣れた白い廊下を駆け出した。

誘つてくれたその理由は、さつきの表情や声の調子を反芻してみると、突然口が達者に、突拍子もないことを言い出した僕を心配したのかもしれない。

でも口実なんてもうどうでも良かつた。

ごめん、きこ。やつぱりバラだ。

バラが一輪なんて気取り過ぎだから、対極に思えるチューリップを付け加えてみたんだ。はたして君は、オールド・ローズを知っているだろうか。イギリスの、品位の高いバラで、普通のバラよりも大きくて、どこかのんびりとしているんだ。当日は、鮮やか

な一色で染まつたその花を、舟の形をした、手の平サイズの花瓶に挿して、裏ポケットに忍ばせておく。津川が、そんなもの作ればいいんだよ、って材料とか教えてくれたんだ。そして夏子さんからは君を拝借して、花を差し出す。そこまで進めばいくら僕だって告白できるだろう。もちろん、その舟に添えた一輪が君の瞳に捉えられて、君なりに受け止められるまで僕は動かない。

その結果は置いておいて、終わつたらみんなで飲みに行こう。気まずくなんかはならない。三年生になつてからも僕らの間に挟まれたコーヒーやアルコールの缶の集積が、僕らが互いに歩み寄つた何よりの証明になると君は思わないか。

そのあと、一人で大学に移つてからも、僕は舟と君の神話を持つたまま強くなろうとするだろう。单なる力が上手く使えるように。僕らの再会を守れるように。

そして、ふとした時には、川辺の景色とオールの音に、祈ると思うんだ。